社会学において必要な想像力とは

『論文の書きかた』著：佐藤健二（2014 年　弘文堂）

田中　このみ

「論文の書きかた」という名のハウツー本は世の中に沢山ある。「まず、テーマを決め、その後・・・」など、当たり前のことを書き連ねている指南書は、レポート課題を日々提出し、ゼミで教授に何でも相談できる環境にいる大学生が一生懸命読む必要などない。しかし、本書はそのような大学生、特に社会学を専攻している人ならでも読むべき“新しい”論文の書きかたの本となっている。

筆者の佐藤健二は、歴史社会学、社会意識論、社会調査史、メディア文化などを専攻としている社会学者だ。これまで本書だけでなく、「社会調査史のリテラシー」（2010、新曜社）など、社会学関連のハウツー本をいくつか出版している。本書では、長年論文を執筆してきた筆者の経験から「社会学」における想像力の働かせ方が書かれているのだ。

例えば「問い」の設定の仕方だ。筆者によれば、問いは、「自分の興味関心を疑問形で表現したもの」や、社会調査における「仮説命題」のように平板で窮屈なものではない。一文で表さなければ正確でないから駄目だという強迫観念に駆られがちだ。しかし、「問い」は単数形ではなく複数形の組み合わせでないと表現しきれないものかもしれない。だからこそ、自問自答の中で自分の興味の根源を深く考えていく必要があると佐藤は述べる。社会学がフィールドにしている「社会」という場は、とても複雑だ。その中で自分が明確な「問い」を立てる上で、筆者のアドバイスはとてもためになるだろう。

筆者が「あとがき」でも述べているように、この本は一度でも論文を書いたことのある人向けで、まだ書いたことのない私にとっては少し細かすぎてわかりづらいところがあった。しかし、「問い」の設定の仕方や書きかたの指南など、今から卒論を書くにあたって参考になる問題設定の仕方や、社会学的考え方を知ることができた。今のようなぼんやりとした卒論への不安を抱える時期に、卒論準備の第一歩として読むのに最適な本であると思う。